先人を偲ぶ

児玉英一先生を訪ねて

事務局　　松端　孝元

了戒さん　　児玉先生　　中島さん
平成２年８月４日（於）第 64 回　京都静坐会

児玉先生
昭和６３年１０月１０日
（於）岡田虎二郎先生のお墓参り

今回の先人を偲ぶシリーズは児玉英一先生をお訪ねすることにいたしました。

何か資料はないかと松下先生にお尋ねすると、中島寛明様が編集された写真帳「児玉英一先生の思い出」というタイトルの印刷物を見せていただきました。

よく見ると同様の本を私にも御恵与頂いておりましたのに児玉先生を知らなかったものですから気が付きませんでした。中島様には大変失礼をしてしまいました。掲出の写真はその写真帳から転写させていただいたものです。

又、その本の記述から分かったのですが中島様の静坐は、昭和四十四年四月十六日、児玉英一先生にお会いした時から始まっているようですのでもう五十年以上の実績をお持ちの方です。その間、柳田誠二郎先生、柴田徹士先生、小松幸蔵先生、杉田正臣先生等々の高名な先生方にもお会いし、ご指導頂いていることも分かりました。私も同世代ながら、まだ三十数年の実績しかございませんので残念ながら小松先生しか存じ上げません。もう少し早くご縁ができておればとうらやましく思われます。

中島様には、掲載の写真について確認のためのお手紙をお出ししましたところ、早速にお返事を頂きましたがその中で、安岡正篤先生にもご指導頂いておられたのでしょうか安岡先生は、児玉先生のことを「国師である。」と申されていました。との説明がありました。私はその説明を聞き、なるほどと一人合点がいきました。と言いますのは、児玉先生の遺稿は、毎号のように静坐誌に掲載されておりましたがそれを読んでいくだけで十分先生の人となりを推し量ることができるように思えたからです。

静坐の友

季刊 59 号

静坐の友社

編集発行人　松端孝元
〒五九六―〇〇〇二
大阪府岸和田市吉井町一―二〇―四
FT　〇七二―四四四―五九七五
AE
XL
携帯　〇九〇―三六二九―二二五〇

又、その冊子には、平成二年十二月六日付け日経新聞に掲載されていた児玉先生の訃報も載せられておりましたので、次に紹介させて頂きます。

次のような内容でした。

児玉英一（こだまえいいち）氏元江口証券＝現三洋証券専務
五日午後一時十三分老衰のため川崎市宮前区の聖マリアンナ医科大学病院で死去八十七歳
自宅は横浜市港北区日吉本町　告別式は七日午後一時から東京都港区高輪高野山東京別院で喪主は女婿山本英二氏

なお、私は児玉先生のことをよく知りませんので、静坐誌を見ていきますと松下正義先生の追悼文が目に止まりました。児玉先生のことがよく理解できますので次に紹介させて頂きます。

児玉先生をお偲び申して

松下　正義

児玉先生の七回忌が巡ってまいり、改めて在りし日の先生のお姿が目前に浮かんで、深い悲しみを覚えます。

先生は静坐に対して、何ものにも代えがたい信の心をお持ちでありました。そうしてこれこそ間違いのない只一つの道と教えてくださいました。

静坐という大きな宝物を与えてくださった方であった先生を、心のよりどころとして、生きていきたいと常に私は思っております。それは先生が静坐に対して全身全霊で坐しておられたからです。そのお姿にいつも強く打たれておりました。六十周年の記念文集に先生は「小林信子先生は、岡田虎二郎先生の創始せられた静坐道を正しく世に伝え広めよと静坐社を創立され、半世紀にわたって数知れぬほど多くの人々に静坐の種を蒔き育ててこられました。私ども教えを受けた弟子達は、先生のご遺志を体して、及ばずながら、今後とも一層精進を続けなければならないのであります。」と信子先生への尽きぬご恩を静坐によって果たそうと謙虚に記されたお言葉を拝読して頭の下がる思いが致したことでした。

先生は若き頃より「木鶏」という号をもっておられました。洒落た句を作られ先生の天衣無縫なご性格の一面を知り微笑ましい気になりました。

茶道とは茶碗の尻をのぞくなり
逢いに行く靴とも知らず揃えられ
電柱に用ある犬を待ってやり　木鶏

この句で秀逸の成績をとられたということです。一度こんなことがありました。

奥様に頼まれたと申されまして、私ども夫婦と共に京都の町を「うば玉」という菓子をたずねて、あちこちと車で回り、あとで「あの時は楽しかった」と仰せられたことなど、なつかしい思い出でありました。

先生が江口商事の社長であられた折、私の勤め先が近くでありましたので、先生自ら、ご本を持ってきてくださいましたが、そんな時、同僚たちは、威風堂々とした立派な先生のお姿に接して畏敬の念を持ったと話しておりました。

お若い頃から、様々なご苦労に遭遇されたとお聞きしておりますが、それをのり越えられ、偉大な生涯を全うされたのであります。

ここに七回忌にあたり、静坐を通して、先生の御心を仰いで参りたい思いでいっぱいであり最後に岡田虎二郎先生、五十年祭にあたりお詠みになられた先生の句を紹介します。

黙々と坐れ恩師の声がする　英一
（平成九年静坐誌第百四十号）

遺稿Ⅰ 呼吸のコツを教わる

児玉　英一

今、柳田先生から大変重要な我々の身に沁みるお話を頂き本当にありがとうございました。小林参三郎先生にはお目にかかったことはございませんが、信子先生には大変お世話になりまして私が今日こうやっておられますのは信子先生のお陰だと思っています。

私は、数え年十七歳の時、実業の日本社から出ました「岡田式静坐法」という本を読みまして坐りかけたのですが、その当時は越後の田舎にいたものですから先生もおりませず自分でその本を見て坐っておりました。ところが静坐というものはなかなか本を見ただけではできないものでして、皆様ご経験がおありでしょうけれども、坐れば坐るほど苦しくなって頭に血がのぼりなかなか続きません。そうするうちに大阪へ仕事の都合で出てまいりまして、静坐会に毎週通いましたが納得できずますます苦しくなり、そこで京都の小林先生にお目にかかって呼吸のコツ、仕方を教えていただきました。それから静坐というものが本当に分かるようになり、静坐が楽しくなってまいり、楽しいから楽に続けておれまして、この静坐の恩恵を非常に蒙っているわけで、本当に信子先生には私は全く尊敬申し上げ、お慕い申し上げているのでございます。

私は今年七十二歳になりまして、小林信子先生は七十二歳の頃どういう風になさっておられたのだろうと時々思うのです。ところが先月大阪静坐会が今の静坐会場に移りましてから丁度二十周年になりますので記念静坐会がございました。その時ある会員の中から小林先生の日常の御生活についてのご質問があったところ、曽我先生がその質問にお答えになりました。「小林先生は静坐の中におくらしになっていた。」と。ハッと私は思った。なるほどそういうことだ。「小林先生は静坐の中でお暮らしになっておった。我々はくらしの中に静坐をしているのだ。その違いだ。」と。これは全くその通りだと私は非常に納得いたしました。私は、今年で五十五年間静坐をやっておりますが、なかなかそういう心境のところまで行きません。全く暮らしの中のちょっぴり静坐をしているというようなことで小林先生のようになればこれは本当のものじゃないかと思いますが、けれどもなかなかそうはいきません。なお、私がどれだけ小林信子先生をお慕いし、尊敬申し上げているかと申し上げますと小林先生からお電話を頂いたとき（小林先生は足をお痛めになってから寂しいことがあると私のところへ電話をかけていらっしゃるのです。）家族のものが取次ぐ時に「お父さん教祖さんからのお電話ですよ。」とこういうのです。小林先生に対する私の態度が全く信者が教祖に対する態度であったのではないかと思われ、そういうことも一つ思い出話として申し上げて私の話を終えたいと思います。（昭和五十年静坐誌第五十四号）

遺稿Ⅱ 美しい星

児玉　英一

「京都の空から美しい星が一つ消えました。」これは東京の木村毅先生からのご弔電の一節でありました。

京都で一生をお暮らしになり全国の静坐の人の為に輝いておいでになった小林信子先生を私共は天の星の如く拝み心の支えとして来たのでありました。

この星が消えたことに無量の淋しさと心の空虚を感ずるのであります。

こんなことを言うことは日頃のお教えに背くのかもしれません。先生は常にしっかり坐っておりさえすれば外部の変化によって心が乱れるものではないとおっしゃっておられましたから。

三月二十七日先生と最後のお別れに菊の花一輪をきれいなお顔の側に捧げました。その時「坐って頂戴」「しっかり坐りましょうね」とお声がしたような気がいたしました。

先生が常に初心の人に、また古い人にもいつもおっしゃっておいでのお言葉であったからです。

先生　・・・・私たちはお言葉のとおり、一生懸命坐りますからどうぞご安心ください。先生さようなら。

（昭和四十八年静坐誌第四十五号）

遺稿Ⅲ 信不退

児玉　英一

実は、今度の実習会には、私は出席できるかどうか分からない状態だったのですが、幸い今日こうして皆様にお目にかかることができました。と申しますのは、先日、仕事の上で大変ショックを受ける問題が起こりまして、そのために体をすっかり壊してしまったのであります。例年、私はこの会では、自分の体験と申しますか、私の恥をお話してまいりましたが、今年も今度、私が体験しましたことをお聞きいただいて何かのご参考にしていただければと思っております。

昨日、個人指導の時間に、岡田先生の「語録」にある「信不退」とはどういうことか、というご質問がありました。これは今更申し上げるまでもないことですが、「信じたらまっすぐにその道を行ずる。後に退かない」ということでございましょう。

柳田先生が岡田先生に初めてお会いになったとき、岡田先生は柳田先生のネクタイをつかんで、ぐっと前へお引きになりました。「その時から私は全く変わったのだ。」と、柳田先生は述懐しておられます。多分、岡田先生のあのご風貌に大きな感銘をお受けになったことも影響したと思うのですが、それ以来、柳田先生は岡田先生の静坐法を信じ切って、今日まで一心不乱にお坐りになって来られて、あのようなご成功を収められたのです。

ですから、まず、信じることが根本です。信じなければ六十年以上も静坐を続けることはできません。「行不退」ということも申しますが、「行」だけでは途中で苦しい目に遭ったりすると挫折してしまってなかなか続きません。けれどもいったん信じて坐ればめったに止められるものではありません。私自身の経験から申しましても、十七歳の時に友人から実業之日本社から出た「岡田式静坐法」という本を借りて読んだとき、「これだ。これこそ私のやるべき道だ。」と信じ込んでしまったのです。この信じ込んだことが、六十何年間静坐にご縁がつながれ、八十歳の今日までの幸せを頂いているのであります。

さて、「人生は苦なり」と申しますが、私もこれまで幾度か苦しい困難な目にあって参りました。そして困難にぶち当たった時私は必ず静坐をして事態を切り抜けてきたのであります。ところが、今回の困難は七月初めからずっと続き、十三日には遂に最悪の事態になりました。その時、血圧がふだんの一五〇から一度に二〇〇まで上がってしまったのです。それで医者へ行って血圧を下げる薬をもらって服用したところ、今度は急に一三〇まで下がってしまいました。一三〇まで血圧が下がりますと、足はふらふらするし、体もふらついてどうしようもなくなり、医者から休養を強く申し渡されまして、とうとう三日間会社を休んでしまいました。その時も静坐をすれば治ると思っていましたが、実際坐ろうと思っても体はふらふらするし、胃もご飯がのどを通らないほど固くなっているのです。

六十何年間静坐をやってきて体には自信をもっていたのにどうしてこんな事になったのかとつくづく恥ずかしく、申し訳なく、又大変悩んだのであります。実はこの事を昨日、柳田先生に打ち明けましたところ、「八十歳にもなったら、心臓の止まるような仕事はもうするな」とご忠告頂いたのですが、急に仕事をやめるわけにも参りませんのでぼつぼつそういう風にもって行きたいと思っています。

それでも、休みの三日間は朝から晩まで一心不乱に坐り続けました。そうしましたら

だんだん落ち着きが出てまいりまして、少しずつ回復してまいったのであります。本当に一時は実際、死ぬのではないかと思いましたが静坐をやっていたからこそ、今度もこうして生きのびることができたのであります。

今度の体験で、私はいろんな事を勉強いたしました。人間はその経験した境涯によって、物事の感じ方が大変変わるものであることが分かったのです。先程もお話が出ましたが、先日ある高名な学者のご家庭で、孫が学者のおじいさんを刺し殺すというなんとも痛ましい事件が起こりました。いつもならそんなに深くは考えないのですが、私はそのニュースを聞いて、「その子のお父さんのご心境はどんなだろう。どれほど悩んでおられるだろう。どういう風に事態に対応しておられるだろうか」とあれこれ考えたのです。又、この前の長崎の水害で大勢の方々が家族を亡くされましたが「残された方々の心のうちはどんなだろう、私はこれ位のことでこんなに悩むのだから、おそらくあの方達のお苦しみは計り知れないことだろう」と他人事でない思いであれこれ思いめぐらしたのです。

それとは別に、さきの日航機の羽田での遭難事件がありましたが、私はその十五分前の飛行機で東京へ行ったのです。会社では大騒ぎして私を探していたのですが、私はお昼頃に初めて事故のニュースを知らされたとき、「ああ、よかった。助かった。」と思いました。人間は勝手なもので、自分自身に心の悩みや苦しみがなかったら、あれだけ大勢の方々が亡くなられて大騒ぎになっているのに、「お気の毒だなあ」とは思いません。「よかった。自分は十五分前の飛行機に乗って助かった。」と胸をなでおろしたのです。けれども自分が苦しみ抜いている時に、そういう事件が起こると「事故に遭われた方はどんなに悲しみ苦しんでおられるだろう。私は静坐がある から良かったもののあの方たちはどういう具合にして苦しみに対処しておられるのだろう。」とつくづく思われるのであります。

そのような事で、今年も私の恥を申し上げましたが、静坐のお陰でこうやって来られたのだということだけは皆様に強く申し上げたいと思います。皆様も静坐を信じておやりになれば、間違いなく一生続けられます。あやふやな信じ方では駄目です。岡田式静坐法は、単に体の健康法のためだけではありません。心身一如、霊肉一致と申しましょうか、精神が健康でなければ体はよくならないし、体がよくならなければ精神は健全になりません。この事を私はこの間の事件で改めて経験いたしました。そして静坐の修行がまだまだ足らなかったことを痛感しております。皆さんと共にこれから一層静坐の道に励んでまいる覚悟であります。

（第五十六回静坐実習会でのお話）
（昭和五十八年静坐誌第五十八号）

遺稿Ⅳ
まず静坐から

児玉　英一

『悠々タル哉静坐。堅キコト鉄ノ如ク、又軟キコト綿ノ如シ。静カナルコト林ノ如ク、又疾キコト風ノ如シ。常ニ実、而シテ又常ニ虚。悠々タル哉静坐。』

この一文こそが私を静坐に結び付け静坐を信じさせる機縁となったのであります。これは大正八年友人から借り受けた「実業之日本社発行の岡田式静坐法」の序文の一節でありますが、当時十七歳の多感な少年だった私の胸を激しく打ったのでありました。

それから岸本能武太先生の「静坐三年」橋本五作先生の「岡田式静坐の力」など静坐に関する書を貪り読んだのでありますが，何分にも越後の片田舎では適当に指導して下さる方もなく、書物による独坐では要領も分からず、心のみはやるばかりでありました。一度岡田先生にお目にかかりたいということは私の切なる願いでありましたが、当時事情があって見習い奉公に出された身の上であった私には、到底上京などできることではなかったのでありました。

その頃の私はひたすら岡田先生への敬慕の思いに明け暮れしたことでありました。現在で

もそのことは同じでありますが、只ご在世中に一目でもお会いしておったらという心残りを感じることであります。

二十歳の時に大阪へ出ることになりました。東区上本町五丁目に石井倉三郎先輩の静坐会があることを知り、飛び立つ思いでそこへ通いました。しかし残念ながら静坐の本当の要領は会得できず、従って進境も見られませんでした。そうなるとつい怠りがちとなり、長いブランクの時代がありました。

その後、京都の小林信子夫人のご指導を受けるようになり、特に呼吸の要領を教えて頂いてから、グングンと静坐の恩恵を受けることができたのであります。魚が水に帰ったように、健康面でも精神的にも実に、言葉に尽くせない大きな恵みを頂いているのであります。もし静坐の縁がなかったら、今日の私はどんなものになっていたことでありましょう。顧みて誠に慄然たるものがあります。

四十年間証券業界に身を置いている私は困難のたび毎に丹田の力にまかせて、その有難さをしみじみと経験している者であります。

世は人間衛星船が飛び、月への旅行も不可能ではない時代、知っておかねばならないこと、知っておきたいこと、しなければならないこと、したいこと等々目の回りそうな時代ではありますが、何をおいても、まず、静坐からということを日日実証しつつ生きております。

宇宙の真理をかくも平易に、しかも万人が体得できる道をお開きになった、先覚者岡田虎二郎先生の偉大さに今更の如く感嘆し、感謝せずにはおられません。

今後も只一筋にこの道に精進し、自己を養い、意義ある人生を送ることに努めるつもりでおります。

『孝心は親の教をそのまんま』

（江口証券専務取締役東京支店詰め当時）

（小林信子先生喜寿記念誌静坐への道より）

遺稿V 木鶏の話

児玉　英一

「ワレイマダモッケイニイタラズ　フタバ」この電文は昭和十四年一月外遊の途次、インド洋上の船中にある安岡正篤先生へ宛てられたものである。船のボーイが電文の意味が分からず訝りながら届けたところ、先生は、「これでよい。双葉山は負けたんだ。」と一言。これは有名な話である。

当時、無敵の双葉山といわれ六九連勝であと一勝で七十勝というところを安芸ノ海に負けたのは昭和十四年春場所四日目のことであった。

双葉山は、当時、陽明学の大家といわれた安岡正篤先生の教を受け、精神修養を深めていた。ある時、安岡先生から中国の列子の中の「木鶏の話」という寓話を聞き、我こそは木鶏たらんと励んでいたのである。

「木鶏の話」の内容は次のようなものである。

昔、闘鶏飼いの名人に紀渻子という男が居り、王に頼まれて鶏を飼うことになった。十日ほどして王が、「もう使えるか」、と聞くと「空威張り中で駄目です。」と答えた。さらに十日して督促すると、「まだ駄目です。敵を見て興奮します。」と。三度督促を受けた彼は、「まだ駄目です。敵を見下げて小馬鹿にするところがあります。」と言って安易に首を縦に振らない。それから十日経って彼はようやく次のように報告した。

「どうにかよろしい。いかなる敵にも無心です。ちょっと見ると木鶏（木で作った鶏）のようですが、徳が充実してきました。まさに天下無敵です。」と。

この教訓が双葉山をして大きくなさしめたものと思われる。彼はその後も修養怠りなく好成績を挙げ世紀の名横綱として昭和二十年引退し、相撲協会理事長となり、内外の信望を集めたのは周知のことである。

双葉山道場（のちの時津風部屋）創設の時安岡正篤先生の筆になる墨痕鮮やかな、力士

の心得が贈られ掲げられたのである。

力士規七則

一、我等幸に万物の霊長たる人間と生まれ万邦無比の皇国に臣民たり。敬んで臣子の本分を全うすべし。

二、相撲は国技なり。国史と共に成長し、国運と共に消長す。力士たる者、当に日本精神を体現し、風俗淳美を粋養すべし。

三、力士の大成は最も師友の切磋琢磨に待つ。深く師恩友益を念うて報謝の志を忘るべからず。

四、斯の道は須臾も懈怠あるべからず。由来光陰は過ぎやすく、人生は老い易し。須く時に及んで勉励すべし。

五、人にして礼節なしは禽獣に侔。力士は古来礼節を以て聞ゆ。謹んで斯通の美徳を失うことなかれ。

六、力士は質実、剛健を旨とし軽佻浮薄を忌む。宜しく卓然として時流に拘らず、堂々たる風格を発揮すべし。

七、居常健康に留意し、酒を慎み、澹泊身を持し、荒怠相戒め、以って大成せんことを期すべき。

右の「力士規七則」とは吉田松陰の「士規七則」にあやかったものらしく、格調高きものであるが当今の若者には分かりにくい故か、今の時津風親方（前の豊山）になってから平易なものに書き換えられたと聞いているが双葉山以後は、時津風部屋との交友がないので真偽は分からない。

私も双葉山と同じく安岡正篤先生の教を永年に亘って受け、当年七十七歳の馬齢を重ねてきた。省みて恥多きを覚えるが、我が家の床の間に掲げた「木鶏」の額（安岡先生筆）の前に立つと、「未だ木鶏足らず」とのご叱声の声を聞くような思いに駆られるのである。

以上の一文は去る日、私が業界紙に載せたものですが、小林みどり先生のおすすめでここに再録することにしたのであります。

双葉山は相撲道を通じて木鶏たるべく励んだのでありますが、私は岡田式静坐法こそが木鶏たらんと修養する者には最適の法であると固く信じているのであります。只、私が未だに木鶏に近づき得ないのは静坐の修行が至らないのであって、まだまだこれからであり、柳田先生の「一生の静坐」の教を体して修養を積む覚悟であります。

（昭和五十六年静坐誌第七十六号）

原稿募集のお知らせ

早いもので「静坐の友」誌の発刊も次号は六十号となります。松下豊子先生のご逝去に伴い私が発刊作業を引き継ぎましたのは令和元年（第四十号）からでございましたが松下先生の時から数えて通算六十号になります。六十年といえば人間ではめでたく還暦でございます。六十年には届きませんが、回数だけは六十回を数えることになりましたので、この機会に六十回を記念した特集号を発刊し、会員の皆さまの近況をお聞きし、共有いたしたいと思います。

つきましては左記要領で会員の皆さまから原稿を募集いたしますので奮ってご投稿ください。

申し込み要項

字数　五百字以内

標題　自由

内容　各団体、個人の活動内容（活動場所日時、人数、静坐実践例等）

・各個人の日常生活状況、静坐への思いなどなど静坐に関すること。

その他なんでもお寄せください。

締め切り　五月中旬ごろまでに

あて先　静坐の友表紙編集発行人松端まで

編集後記

今回の先人を偲ぶシリーズには児玉先生に登板頂きました。毎回誰を訪ねればいいのか迷いますが、私の浅い経験の中では本当に思案に暮れます。今回も中谷先生や松下先生に相談しておりました時、以前、中谷先生が「一枚の写真が出てきました。」といって見せていただき、すでに静坐の友第四十五号に掲載済みの写真の中に、当時、ご指導頂いていた五人の先生方がうつっています。西元先生、柴田先生、児玉先生、小松先生、能美先生の五人です。中谷先生曰く「静坐五人衆」やと。

以前のことは何も知りません私は、はは～ん。なるほど五人衆かと感動していた記憶がありました。よく見てみるとこの五人の先生方はもうすでに四人まで先人を偲ぶシリーズに登場願っている先生方ばかりでした。それで今回は最後の児玉先生に登板頂いたことになります。編集作業を続けながら私は、何という素晴らしいめぐりあわせかと、ただただ感謝の念で胸がいっぱいになりました。静坐を志す中にも少しばかり中だるみのような気分に落ち込んでいましたので児玉先生のお言葉が身にしみ込んでくるようでした。

遺稿Ⅰで知りました。「小林信子先生は、静坐の中でお暮らしになっていた。」「我々は暮らしの中に静坐を取り入れている。」という段落田の力で!!」というお言葉は以前聞いていましたが、少しオーバーではないかと半信半疑でしたが、なるほど静坐の中で暮らしていたのならお豆腐を切る時にも丹田の力を実感していたであろうと思わされました。中途半端な私の考えにガツンと活を入れられた感じでした。五十五年間やっている先生にしてそうなのですから私ごときはまだまだ小便小僧だと思いました。

遺稿Ⅱは本当に星空から「しっかり坐りましょうね。」という声が聞こえてきそうです。でも、これも残念ながら信子先生の声を聞いた事のない者にとっては幻の言葉ですけれども、素直に「ハイ、頑張って坐ります。」とお返事をさせていただきました。

遺稿Ⅲはまさに信不退の覚悟が試されそうでした。

遺稿Ⅳでは、岡田先生の御教の前にただただうずくまる児玉先生のお姿に自分自身を重ねるのみでした。

そして最後に、木鶏の話です。今、大相撲は大阪場所の最中です。優勝者は尊富士、新入幕で優勝すれば一一〇年目の快挙となるのだそうです。そのことはすごいことだと思いますが、反対に現、横綱、大関はその責務は果たせているのかと疑問が湧いてきます。木鶏の話を聞かせたいものだと思いました。

私は五人衆の最後に児玉先生が出てきてくれたことに本当にうれしく感謝している次第です。静坐界の現状を思い、これからの静坐界を考える時、なくてはならないご意見だと思わされました。

岡田先生語録に「死の寸前まで成長発展する」という言葉がありますがそれには、まさに今回の児玉先生のお言葉をしっかり吟味させていただく必要があるように思われました。まさに「信不退」でなければならないと思います。尊い先人たちの足跡をたどりながら共に頑張って参りましょう。

前頁の原稿募集よろしくお願いいたします。

令和六年度夏期静坐実習会のお知らせ

さて本年度の実習会は例年通り一泊二日で企画いたしました。

日程は八月二十四日（土）二十五日（日）の二日間を予定しております。詳細は次号でお知らせいたしますが、とりあえず、心づもりだけはしておいてください。

まだまだコロナをはじめとする感染症の流行が収まりません。

どうか。マスク、手洗い、うがい、消毒などこまめに行い、体調管理には十分ご留意頂きますようお願い致します。そして、今年の静坐実習会でお会いできることを楽しみにしています。

（事務局　松端　孝元）